

北海道蘭越町立川1遺跡第1次調査概報

長崎潤一・高倉 純・北村成世・田畑幸嗣・谷川 遼

はじめに

北海道蘭越町立川遺跡は1958・1959年に市立函館博物館によって発掘調査がなされた。当時は日本の縄文時代草創期～旧石器時代研究の黎明期であり、1960年に刊行された報告書は北海道でも細石刃核や石刃が出土することを国内に広く印象付けた。また舌部の両側縁を潰すように加工した有舌尖頭器を吉崎昌一は遺跡名を冠し「立川ポイント」と命名した。細石刃石器群と有舌尖頭器石器群が共時存在なのかどうか、長く続いた議論の出発点となった遺跡である。

長崎は札幌国際大学在職中、羊蹄山周辺での旧石器遺跡調査を計画し、2009年に倶知安町峠下遺跡の発掘調査を行った。峠下遺跡は現在も坂梨夏代(札幌国際大学)によって継続調査されている。2017年に早稲田大学での特別研究期間を利用し羊蹄山周辺でのローム層露頭調査、畑地での踏査を行った。また高倉は2016年以降ニセコ町西富遺跡での発掘調査を開始した(高倉・鈴木2017)(高倉2018)。そうした中、両名で何度か蘭越町立川遺跡を訪問し、早田勉に依頼して遺跡近傍のローム層露頭での火山灰採取と分析も行ってきた。立川遺跡の新たな調査に現代的な意義を見出したからにはほかならない。立川遺跡は1950年代には畑地であったが、60年以上耕作放棄地であったため篠竹が密生し、吉崎調査地点に立ち入りこともできず、地点を確認することはできなかった。このため、雪解け直後で篠竹が倒れている時期に調査を行うことが必須であった。

長崎が2022年度から文部省科学研究費補助金基盤(C)を獲得したので、高倉を研究分担者として2022年5月に第1次調査を実施した。本稿はこの調査概要である。なお遺跡名については、北海道教育委員会による埋蔵文化財包蔵地名に従い、以下では「立川1遺跡」と呼称していくこととする。

1. 立川遺跡について

立川1遺跡は、羊蹄山麓を流れ日本海へ注ぐ尻別川の支流である昆布川流域に立地する。昆布川はほぼ南北に貫流し、昆布市街地において合流する。この尻別川と昆布川の合流点には高倉が調査した西富遺跡が立地する。立川遺跡はこの合流点からほぼ6km上流部の西岸に立地する。立川1遺跡のすぐ北側には支流の矢筈の沢川が西から東へ流れ、深い開析谷を形成している。立

川1遺跡は標高132～135mほどを測るが、遺跡北側の矢筈の沢川は標高108mほどを流れており、東側の昆布川はほぼ標高90mの場所を流れている。立川1遺跡の載る「会澤台地」は西側に緩斜面があり標高が高くなっている。地質図幅では台地西側の高位面は基盤に洞爺火砕流堆積物が存在するようである。

1960年の報告（吉崎 1960）と1978年の再論（吉崎 1978）では有舌尖頭器と蘭越型細石刃核、忍路子型細石刃核との関係が議論され、これが長く北海道の縄文草創期～旧石器研究に影響を及ぼした。美利河遺跡での調査事例では有舌尖頭器と蘭越型細石刃核の出土層のわずかな違いが指摘されていたが（北海道埋蔵文化財センター 1985）、決定的とは言えず、1990年代末の千歳市柏台1遺跡において恵庭a火山灰下位で蘭越型細石刃石器群が出土し炭素年代測定値が得られたことで、蘭越型細石刃石器群の古さが決定された（北海道埋蔵文化財センター 1999）。今回の調査で有舌尖頭器と蘭越型細石刃石器群の出土層位について、議論の出発点となった立川1遺跡において確認することができればよいと考えている。

吉崎昌一らによる立川1遺跡の調査で、有舌尖頭器は第Ⅱ地点、第Ⅲ地点から出土している。吉崎は柄に複数の形態が見られることや側辺が磨滅していることを特徴に挙げ、こうした有舌尖頭器を「立川形ポイント」と命名している（吉崎 1960）。立川1遺跡の発掘成果から、立川ポイントは細石刃石器群から有舌尖頭器石器群の段階を埋める石器群に位置するものとして注目されることになった。小林達雄は荒屋型彫器との共伴事例から、立川ポイントを細石刃石器群に後続する段階として位置付けている（小林 1961）。こうした当時の研究動向の中で、芹沢長介は有舌尖頭器の全国編年を示した。芹沢は新潟県中林遺跡出土の有舌尖頭器に立川ポイントと類似する点を指摘し、石器組成が異なっている問題があるとしながらも立川ポイントを中林遺跡と同じ「有舌尖頭器の形態が確立された時期」（段階Ⅱ）に位置付けている。北海道と本州の有舌尖頭器の関連が具体的に指摘されていなかった当時において、芹沢の言及は画期的であったといえよう（芹沢 1966）。

その後、有舌尖頭器の形式的検討を主眼にその変遷や伝播を解釈することを目指した栗島義明は、従来単一視されてきた立川ポイントを6つに区分できることを示した。そして立川系有舌尖頭器と小瀬が沢系有舌尖頭器の類似を指摘し、さらには柳又系有舌尖頭器が小瀬が沢系有舌尖頭器から形態変化したものであるとして、北海道から九州に至る伝播を想定した（栗島 1984）。栗島による北海道の立川ポイントを有舌尖頭器の古段階とする伝播仮説に対して、長井謙治は立川系有舌尖頭器と小瀬が沢系有舌尖頭器に異なる斜方向の剥離が見られることから、これらが別系統に属するものであることを指摘した。長井は、斜行剥離をもつ北海道の立川系有舌尖頭器が本州で見られる向きとは逆の「左肩上がり」であることを指摘し、「左肩上がり」の有舌尖頭器が北海道の後半期細石刃石器群製作と一連の流れに属している可能性を述べた（長井 2008）。

立川ポイントの研究史をみると、立川ポイントは共伴する石器や日本列島の北部で出土したと

いう地域性も相まって、縄文時代開始期の様相を解明する遺物として注目されてきた。大陸からの渡来石器である可能性が模索された。そのための有舌尖頭器の古段階や原初に位置付ける意見も生まれた。その一方で斜行剥離をもつ北海道の立川ポイントと本州以南の有舌尖頭器の関係性を疑問視する声もあり、両地域の有舌尖頭器の同一視については慎重な姿勢が必要かもしれない。

いずれにせよ、立川ポイントが北海道の当該期における石器群の様相の理解に重要な役割を担うことは明らかであり、立川ポイントを含む複数の時期の石器群が一遺跡で確認できる立川1遺跡のさらなる検討の重要性が増している。

また函館博物館報告で第Ⅲ地点出土の「立川形ナイフ」とされた石器は、その製作技術や編年の位置づけの検討が必要となるものである。同じく第Ⅲ地点で出土している板状のパレットと考えられる石器は顔料関連遺物の可能性がある。第Ⅰ～Ⅲ地点でそれぞれ見つかっている大型石器は石斧未成品とも考えられ、神子柴・長者久保石器群との関係も興味深い点である。

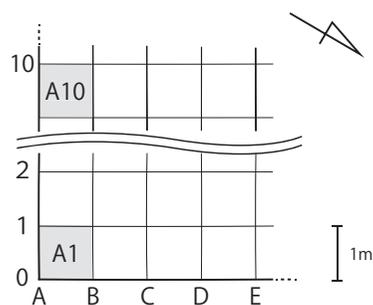
函館博物館報告を現在の編年の視点で見ると、各地点とも複数の時期の石器群が混在しているように見える。立川1遺跡では細石刃石器群以前の石器群、複数の細石刃石器群、有舌尖頭器石器群、大型石斧石器群という、後期旧石器前半期から縄文草創期までの石器群が一遺跡で見つかっていることがわかる。こうした石器群の複雑な様相について、層位、平面分布、石材組成など多くの視点から新たな調査資料を得て分析することで、1958・1959年調査資料に新しい光を当ててみたいと考えている。

2. 調査の方法と経過

(1) 調査の方法

調査初日に遺跡の現状を確認したところ、現地は雑木が点在し厚さ15cm程の雪で覆われその下にクマザサが繁茂していたため、地形の詳細を確認することは困難であった。そのため、舌状台地の先端部と思われるところを任意の点から1m幅で北東から南西へと伸びる線と南東から北西に伸びる線を引き、1m×1mの区画に区分した。北東から南西に伸びる線はアルファベット、南東から北西に伸びる線は数字を用い、その交点をアルファベットと数字で示した。グリッドの呼称は区画の南側の点(区画に正対すれば左上の点)を用いた(第1図)。

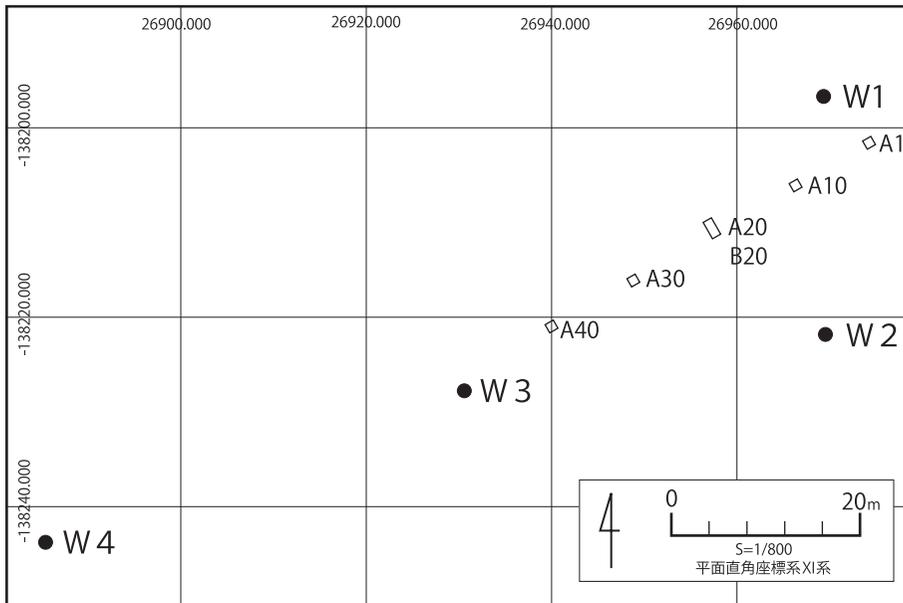
A1、A10、A20、A30、A40、B20を調査区として設定し、本調査ではA1、A10、A20、A30、B20の掘り下げを行った。函館博物館報告書の地図から判断し、A1は報告で第Ⅰ地点とされた地点に近いと判断され、A20・B20、A30は第Ⅱ地点とされた地点に近いと考えている。



第1図 グリッドの呼称

第1表 基準点の座標

座標	X	Y	Z
W1	-138196.867	26968.695	131.801
W2	-138222.099	26968.875	131.916
W3	-138228.026	26930.597	132.648
W4	-138244.211	26886.234	132.870



第2図 基準点と調査区

基準点は事前にシン技術コンサルに依頼し4点設定した。座標は第1表に示したとおりである(第1表、第2図)。遺物に関しては、レイアウトナビゲーターを使用して位置情報を記録した。

掘削は表土から人力で行い、遺物包含層が検出された際は、5mmメッシュの乾ふるいにかけてた。A30は土壤水洗用に土を採集してある。1cmを超える炭化物は回収し、アルミホイルで包んで保管した。埋め戻しに関しては、壁面をブルーシートで保護し土嚢を敷き、その上に掘削土を充填している。写真撮影は作業前、遺物取り上げ時、掘削終了後に適宜撮影した。

(2) 調査の経過

本調査の経過は以下のとおりである。

4月28日 早稲田大学考古学研究室にて測量機材等の準備を行う。北海道大学から発掘機材などを搬出した。また現地ではシン技術コンサルが基準点測量を開始した。高倉・長崎は蘭越町教育委員会を訪問。

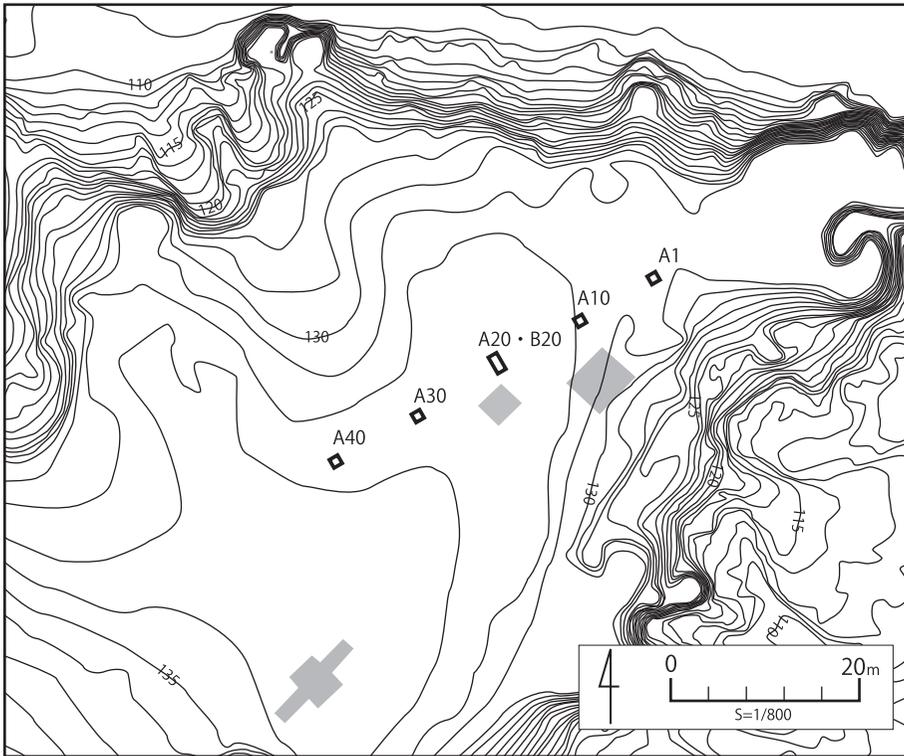
北海道蘭越町立川遺跡第1次調査概報

- 遺跡へ入るための林道の最上部はまだ積雪が残っていた。立川遺跡も積雪が20～50cm程度残っていて、藪が積雪下にあった。このため吉崎の発掘当時の畑地は60数年の間に雑木が生えているものの、おおよその形が判別できた。この畑の形を目安に吉崎調査区を推定し、本調査の発掘区を設定することにした。雪が溶けてくると背丈ほどの藪が次々と立ち上がってしまい、広い範囲を見渡すとが次第に困難となった。
- 4月29日 早稲田調査隊、北海道に到着。現地では基準点の測量を継続。
- 4月30日 現地の現状確認後、機材置き場の設営。周辺の除雪・除草。調査区（A1・A10・A20・A30・A40）の設定のため測量を行った。
- 5月1日 A1、A10、A20の掘削開始。
- 5月2日 発掘作業を継続。A1で細石刃出土。以降、適宜遺物出土状況や掘削状況の写真撮影、遺物の取り上げを行う。A20で黒曜石製石器集中部を検出。黒曜石製有舌尖頭器舌部出土。
- 5月3日 作業を継続。A20の北東側にあたるB20を拡張して掘削開始。
- 5月4日 作業を継続。A30の掘削開始し、頁岩製有舌尖頭器と土器が出土。次回の調査に備え、西側へ調査区の設定。A1の掘削終了。
- 5月5日 A1北壁のセクション図を作成。A10、A20、A30の掘削終了。早田勉（火山灰考古学研究所）、山縣耕太郎（上越教育大学）が到着し、層位観察とローム層サンプルを採取。
- 5月6日 ドローンによる空撮。調査区埋め戻し、機材撤収作業。早田・山縣によるローム層サンプル採取。次回調査のため新たな発掘区への杭打ちを行った。
- 5月7日 北海道大学へ発掘機材等の機材を運搬。早稲田調査隊、帰京。

（3）地形の把握

遺跡の載る台地の地形確認のため、ドローンによる空撮を実施し、フォトグラメトリーによる3Dモデルおよび数値標高モデルから投稿線図を作成した。積雪が部分的にかなり残っていたため、通常の地形測量は困難であった。そこで連続撮影した空撮画像から Agisoft 社の Metashape を用いて作成した台地の数値標高モデルに基づいて1m間隔の等高線図を作成し、Adobe社のIllustratorでトレースした。航空写真を用いる関係上、雪や木々といった障害物が多い場所では地表面を正確に反映した3Dモデルを生成することは難しい。したがって、作成した等高線図は精緻なものとは言えないが、地形概要の把握は可能と考えている。遺跡の立地する舌状台地の張り出しと急峻な崖線は、今回作成した地形図上からも十分に理解できよう（第3図）。

また吉崎報告では、調査区と畑地が示された地形略図しか掲載されていないため、今回作成した地形図との照合は困難であった。第3図の吉崎調査区は林地から推定したおおよその位置を示



第3図 等高線と設定した調査区位置（トーンは1958・1959年調査区の推定位置）

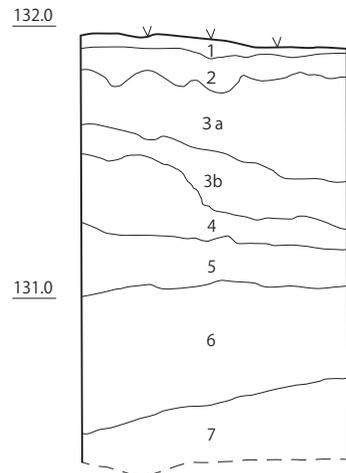
したものであることを記しておく。

調査の成果と課題

(1) 層位

地層の確認を行うためにA1を深く掘り下げた。ここでは、A1の北壁の層位を記載する（第4図）。

- 1層：黒褐色表土層（7.5YR 3/1）。粘性が弱く、しまりは弱い。クマザサによる浸食が見られる。
- 2層：暗褐色土層（7.5YR 3/4）。粘性がやや弱く、しまりは弱い。1mm～6mm程度のローム粒が見られる。3a層との境界は不整合。耕作土と考えられる。遺物出土。
- 3a層：黄橙色ローム層（7.5YR 7/8）。粘性がやや強く、しまりはやや弱い。赤、白、黒のスコリアを少量含む。全体はハードロームであるが、上部はソフト化



第4図 A1北壁層位

している。ハードロームとソフトロームがまだら状に混じっており、水河性の土壌攪乱が起きたと考えられる。上部から中部にかけて遺物出土。

3 b層：黄橙色ローム層 (7.5YR 7/8)。粘性がやや強く、しまりは弱い。4層の黄色火山灰を含む。混じる火山灰の粒子は上方へ向けて減少する。4層との境界は凹凸が激しい。火山灰の削剥が起こっていたと考えられる。遺物は見られない（以下同じ）。

4層：黄色火山灰層 (2.5Y 7/8)。粘性が弱く、しまりはやや強い。黒褐色の粒子を含む。最下層に明褐色シルトの火山灰の薄層（厚さ7mm～10mm）が堆積。ワンフォールユニットの中で変化したものと考えられる。山縣耕太郎氏による肉眼での産状の観察ではクッタラ火山起源のテフラではないかとの指摘を受けた（分析中）。

5層：褐色ローム層 (7.5YR 4/3)。粘性が強く、しまりはやや強い。1mm程度の黒スコリアを微量含む。3層と比べやや暗い。

6層：橙色土層 (7.5YR 6/8)。粘性が強く、しまりは弱い。10mm程度の安山岩の角礫を含む。5層のロームに7層の砂礫が混じったもの。

7層：にぶい橙色砂層 (7.5YR 7/4)。粘性がやや強く、しまり弱い。10mm～60mm程度の安山岩の角礫を含む。各層5～20mmの厚さのラミナ状堆積。

以上がA1の層位である。A10、A20・B20、A30は2層～3層上面までしか掘り下げていないため、今回の調査で層位図作成は行っていない。3層上面までの層位は概ねA1と似た層位を持つ。函館博物館報告（吉崎 1960）の「上部ローム」は本調査で確認した3層に、「下部ローム」は5層に相当すると考えられる。

地主の会澤守氏からの聞き取りによると、1950年代は畑として耕作していたが機械等の利用はなく手作業で耕作されていたという。各調査区で層位の大きな攪乱は見られず、平面的には遺物はある程度、原位置を保っているとも考えられるが、A30で出土した頁岩製有舌尖頭器表面には複数の褐鉄鋼痕跡が観察でき、縁辺には2か所の顕著なガジリ痕が認められる。これらは農耕具との接触痕跡と判断され、本来の出土層位を離れていることが推定されよう。

（2）出土遺物

本調査では、A1、A10、A20、B20、A30から石器が129点、A30から土器が23点出土した。土器は全て非常に小さく文様や部位を推定することができなかった。國木田大氏（北海道大学）に土器付着炭化物による炭素年代測定を依頼したが、残念ながら炭化物の付着は認められなかった。土器の詳細については本報告に譲り、本稿では石器について報告する。大半がチップ（碎片）や剥片であったが、有舌尖頭器や細石刃も確認することができた。各調査区の組成は以下の表のとおりである（第2表）。尚、二次加工のない石器で1cmを超えるものを剥片とし、1cm未満のものをチップ（碎片）としている。主要な石器である7点を図示した（第5図）。

第2表 石器組成

	有舌尖頭器	石刃	細石刃	スポール	剥片	チップ	礫	計
A1	0	1	1	0	2	3	4	11
A10	0	0	0	1	1	0	1	3
A20	1	0	0	0	38	44	0	83
A30	1	1	0	0	0	1	0	3
B20	0	0	0	0	9	19	1	29
計	2	2	1	1	50	67	6	129

第5図1は有舌尖頭器である。A30グリッド2層出土。石材は頁岩である。基端部の一部が損しているがほぼ完形のものである。表面の左右2箇所にはガジリが見られ、裏面には金属との接触痕があることから、耕作に伴い農機具によって傷つけられたと考えられる。身部は表裏両面が丁寧に調整されている。舌部の両側縁には潰れ痕が認められる。

2は有舌尖頭器の基部である。A20グリッド2層出土。石材は黒曜石である。両側縁は磨かれて潰れている。剥離の切り合い関係から左側が後に剥離が入れられている。

3は細石刃である。A1グリッド3層出土。石材は頁岩である。やや幅が広いという特徴から、蘭越型の細石刃核から剥離されている可能性がある。

4の背面は転礫面であり、連続する剥離が行われ稜が形成されている。稜付き剥片かスポールと考えられる。A10グリッド2層出土。石材は頁岩である。中ほどで折れており、打点付近を折損している。

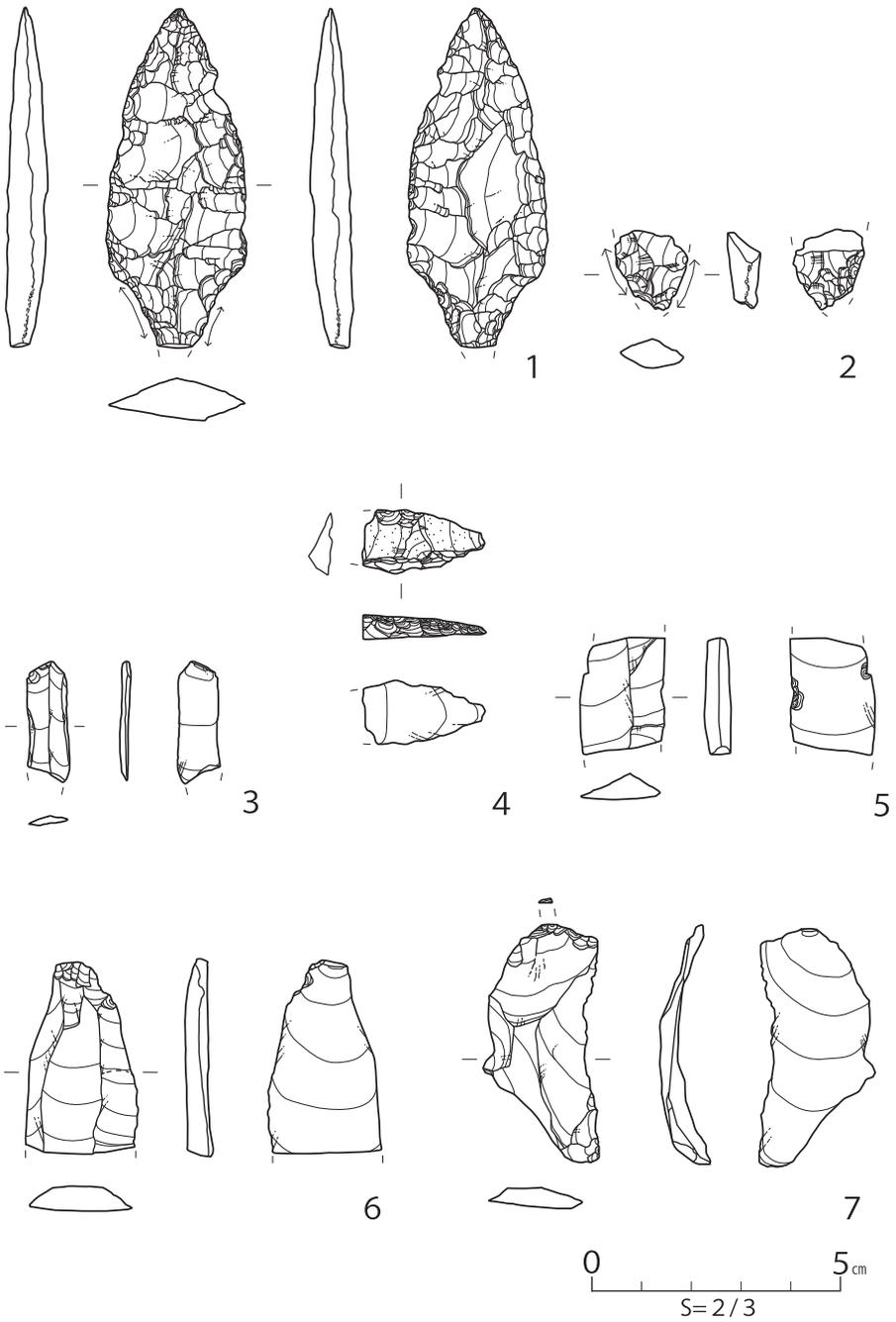
5は石刃である。A30グリッド2層出土。石材は頁岩である。両端を折損している。同一方向、同一打面からの連続する剥離面で構成されている。裏面両側縁に一部加工が認められるが、ガジリの可能性もある。

6は石刃である。A1グリッド2層出土。石材は頁岩である。中ほどで折れており、末端部を折損している。頭部調整が入れられている。背面は同一打面からの剥離で構成されている。

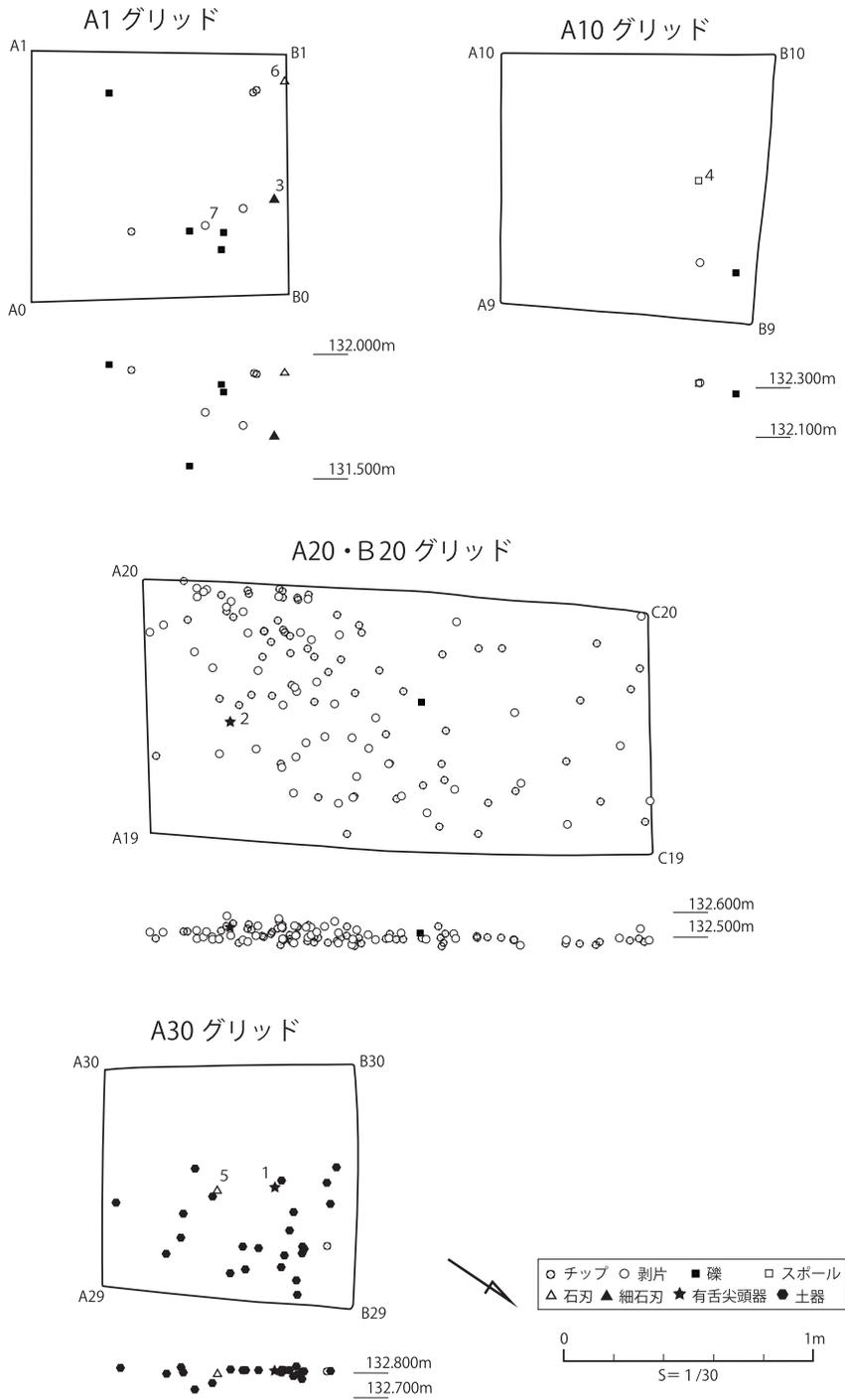
7は剥片である。A1グリッド3層出土。石材は頁岩である。中ほどで折れており、末端を折損している。表面は複数の方向、打面からの剥離で構成されており、末端部の方が厚く反っていることから、細石刃核の石核の調整に伴って剥離されたものだと考えられる。

(3) 遺物分布

遺物分布は以下の図の通りである(第6図)。A20、B20でチップや小さい剥片が多量に出土している。調査期間の制限もあり調査区が広げられず石器集中部の範囲は判明していないが、有舌尖頭器の基部も出土しており、有舌尖頭器やその他ツールの製作に関連する石器集中部であると考えられる。



第5図 石器実測図



第6図 遺物分布図 (数字は図示した石器)

(4) 今後解明すべき学術的課題

最後に本調査の成果を踏まえ、今後解明すべき学術的課題について考えていきたい。本調査では、函館博物館調査(吉崎 1960)の調査区を確認することは出来なかったものの、有舌尖頭器や細石刃をはじめとする石器129点、土器23点が出土した。大半が2層とされる耕作土からの出土である。

頁岩製の有舌尖頭器、黒曜石製の有舌尖頭器舌部は2層とされる耕作土からの出土である。一方、1点ではあるがA1グリッドでは細石刃がローム層である3層から確認されたことは、一つの成果であろう。有舌尖頭器の本来の出土層が耕作によって削平されたのか、それとも遺跡内のどこかに本来の包含層が残存しているのかは今後の課題である。

また細片の土器群が、有舌尖頭器と近接して出土したことも、耕作土中での出土であり、両者が共伴するのか、全く別時期のものか現在は判断がつかない。調査区を拡張し、下位の層位まで掘り進めて、両者の関係について把握したい。

遺物出土層を掘りきったのはA1グリッドのみであり、他の調査区はまだ掘り下げ途中である。今回の調査はわずか5平米の調査であり、立川1遺跡にはまだまだ豊富な出土資料が期待される。

函館博物館調査(吉崎 1960)の発掘地点を1次調査では確認することはできなかったが、調査面積を広げることで確認できるだろう。立川1遺跡の詳細な様相はまだまだ判明していない。良好な資料を有する立川遺跡の調査を進めることで、道南地域における細石刃石器群以前の石器群から、細石刃石器群、有舌尖頭器石器群までの長期にわたる石器群の変遷過程の把握に努めたいと考えている。本地域の石器群変遷の詳細な把握は、更新世末における北海道と本州北部の石器群の同時性の把握、影響関係の解明の上で、重要である。立川1遺跡の石器群の解明は、そうした可能性を示唆するものである。

最後になるが、今回の調査を許可していただいた地主の会澤 守さまに感謝したい。また蘭越町教育委員会には調査にあたり機材などの借用に便宜をはかっていただいた。本稿の図版の作成には調査に参加した早稲田大学文学部考古学コースの阿部嵩人君、加藤滉大君、鯉沼来人君の協力を得た。記して感謝の意を示したい。

引用・参考文献一覧

- 青木要祐 2018「遠軽町タチカルシュナイ遺跡群の現代的意義」『北海道考古学』54
安斎正人 1996『現代考古学』同成社
帯広市教育委員会 2006『帯広市埋蔵文化財調査報告27：帯広・大正遺跡群2』
栗島義明 1984「有舌尖頭器の型式変遷とその伝播」『駿台史学』第62号、50-82頁、駿台史学会。
小林達雄 1961「有舌尖頭器」『歴史教育』第9巻第3号、49-50頁、日本書院
白石浩之 1989『旧石器時代の石槍』東京大学出版会

- 芹沢長介 1954 「関東及中部地方に於ける無土器文化の終末と縄文文化の発生とに関する予察」『駿台史学』第4号
- 芹沢長介 1966 「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」『日本文化研究所研究報告』第2集、1-67頁、日本文化研究所
- 高倉 純・鈴木建治 2017 「北海道ニセコ町西富遺跡の調査」第18回北アジア調査研究報告会発表
- 高倉 純 2018 「ニセコ町西富遺跡の調査と北海道南部の旧石器研究史」北海道旧石器文化研究会2017年度定例研究会発表
- 高倉 純 2020 「峠下型細石刃核再考」『日本考古学』50
- 寺崎康史 2006 「北海道の地域編年」『旧石器時代の地域編年の研究』
- 千葉英一 1985 「北海道地方の細石器文化」『考古学ジャーナル』No.306
- 鶴丸俊明 1979 「北海道地方の細石刃文化」『駿台史学』第47号
- 長井謙治 2008 「石器づくりの考古学 実験考古学と縄文時代のはじまり」同成社
- 長沼正樹 2005 「日本列島における更新世終末期の考古学的研究：縄文文化起源論と旧石器時代終末期の学説史に着目して」『論集忍路子』1
- 夏木大吾 2017 「遠軽町タチカルシュナイ遺跡M-I 地点発掘調査概要報告書—2017年度調査—」
- 橋詰 潤 2009 「「刺突具」利用の変遷に関する一試論：新潟県域における杉久保石器群から縄文草創期の比較から」『新潟県の考古学』II
- 橋詰 潤 2015 「後期更新世末期の本州中央部における両面加工狩猟具利用の変遷」『第四紀研究』54(5)
- 橋本勝雄 1988 「縄文文化起源論」『論争・学説日本考古学』第2巻 雄山閣
- 北海道埋蔵文化財センター 1985 『今金町美利河1遺跡』
- 北海道埋蔵文化財センター 1999 『千歳市柏台1遺跡』
- 役重みゆき 2012 「蘭越型細石刃石器群の技術構造」『東京大学考古学研究室紀要』26
- 吉崎昌一 1960 「立川遺跡の出土状態と遺物」「結語」『立川—北海道磯谷郡蘭越町立川遺跡における無土器文化の発掘調査—』市立函館博物館紀要 No.6
- 吉崎昌一 1978 「立川以後」『立川』復刻版別刷